

LEVEL

2

Web
Tadoku
Books

赤い魚と子ども
あかさかなこ

原作
げんさく

小川未明
おがわみめい





朗読音声のダウンロード
Audio download

★^よ読む^{まえ}前に Before you read

《^{たどく よ かた}多読の読み方》

^{たどく}多読とは、とてもやさしい^{ほん}本から^{たの}楽しくたくさん^よ読んで^{にほん}日本語を^み身につけていく^{ほうほう}方法です。

^{つぎ}次の4つの^{まも}ルールを守って^{たの}楽しく^よ読みましょう。

1. やさしいレベルから^よ読む
2. ^{じしよ}辞書を引かないで^よ読む
3. わからないところは、とばして^よ読む
4. ^{すす}進まなくなったら、^{ほか}他の^{ほん}本を^よ読む



《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. Start from scratch.
2. Don't use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.



川かわの中なかに、黒くろい魚さかなたちが住すんでいました。

春はるになると、川かわのそばでいろいろな

花はなが咲さきました。魚さかなたちは、水みずの中なか

から、その赤あかい花はなやピンクの花はなを

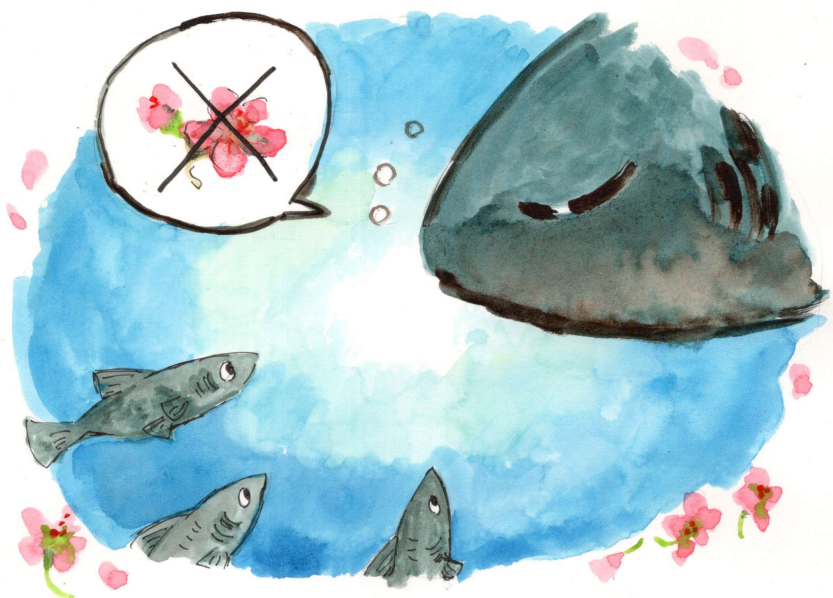
見みて言いいました。

「きれいだなあ。水みずの上うえにはあんなに

きれいなものがたくさんあるんだ。

行いってみたいなあ」





魚さかなの子こどもたちも言いいました。

「お母かあさん、ああのはなきないな花はながほほしい」
すると、魚さかなのお母かあさんこは、子こどもたち
に言いいました。

「遠とおくから見みるだけみですみよ。花はなが水みづの
上うへに落おちてきても、食たべてはいけませ
んよ」

子どもたちが、聞ききました。

「お母かあさん、どうして花はなを食たべては

いけないの？」

お母かあさんは困こまった顔かおで言いいました。

「昔むかしから、花はなは食たべてはいけないんです」

子どもたちは、お母かあさんの言いうことが、わかりません

でした。

— あの花はなの花はなびらが、この水みづの上うえに、

みんな落おちてくるといいなあ —

おも
と思おもいました。

ある日、強い風が吹いて、花が散って、川に落ちました。

「ああ、花びらが降ってきた！」

魚の子どもたちは、とても喜びました。

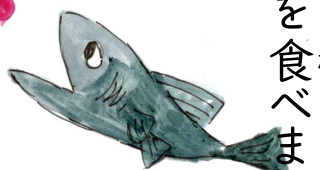
花びらは、次から次へと、たくさん

落ちてきます。

「きれい！ 食べたい！」

三匹の魚の子どもたちは、その花

びらを食べました。

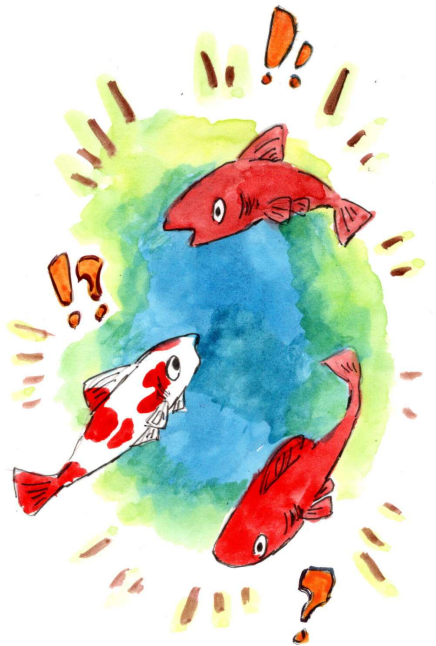


つぎ ひ こ
次の日、子どもたちの黒い体は、
にひき あか いちひき しろ あか
二匹は赤に、一匹は白と赤になって
いました。子^こどもたちのお母さん^{かあ}
は、それを見て泣^なきました。



どうして泣^ないたのでしょうか。三匹^{さんびき}の
子^こどもたちが、赤^{あか}くてとてもきれいで、
川^{かわ}の上^{うえ}からもよく見^みえるからです。

お母さん^{かあ}は、泣^なきながら言^いいました。
「人^{にんげん}間^{かん}が、おまえたち^{みづ}を見て捕^{つか}まえるか
ら、水^{みづ}の上^{うえ}の方^{ほう}に行^いってはいけな^いよ」



まち
町から、人間の子どもたちが
かわあそ
川へ遊びに来ました。

ひとり
すぐに、一人が赤い魚を見て

い
言いました。

あかさかな
「赤いきれいな魚がいるよ！」

ほんとう
「あ、本当だ！」

こあかさかな
子どもたちは、その赤い魚を
つかまいにちかわ
捕まえたくて、毎日川に来ました。



町では、子どもたちのお母さんが心配して言いました。

「どうして、そんなに毎日川へ行くの？」

「赤い魚がいるんだ」

と、子どもたちは答えました。

「ああ、昔から、あの川には赤い魚がいるん

ですよ。でも、捕まえるとよくないことが起きる

から、川へ行ってはいけませんよ」

でも、子どもたちは、お母さんの言うことを

聞きませんでした。

それから毎日、

川へ行きました。





ある日のことです。子どもたちは、三匹の赤い魚を捕まえて、
うちへ持って帰りました。

お母さんは、赤い魚を見て言いました。

「ああ、小さいかわいい魚だね！でも、この魚のお母さんは、
今ごろ泣いているでしょうね」

子どもたちはびっくりして聞きました。

「この魚にもお母さんがいるの？」

「いますよ。そして、今ごろ、子どもたちがいなくなったと言っいて、とても心配しんぱいしているでしょうね」



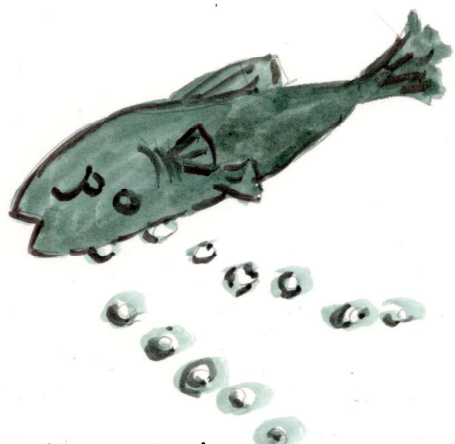
子どもたちは、悲かなしい気持きもちになりました。

ひとり一人ひとりが言いいました。

「この魚さかなを川かわへ返かえそう」

もう一人ひとりも言いいました。

「そうだね。大おおきい川かわがいいね。だれも捕つかまえることができないからね」



子どもたちは、三匹の魚を
大きな川に返しました。でも、その後
すぐに心配になりました。
—あの三匹の赤い魚は、お母さんに
会うことができるかなあ？—



子どもたちは、ときどき、三匹の赤い魚を捕まえた小さい川
にも行きました。でも、
あの三匹の魚は
いませんでした。



なつ ゆうがた にし そら
夏の夕方、西の空に、
あか さかな
赤い魚のような雲が見えることが
あります。子^こどもたちは、それを見^みると、
あか さかな
赤い魚たちのことを思^{おも}って、
かな
悲しくなるのでした。



あか さかな こ
赤い魚と子ども

発行日：2026年7月20日

おがわみめい
原作：小川未明

簡約/監修：NPO多言語多読

挿絵：麦 牛乳



NPO多言語多読

tadoku.org



この作品はクリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。

This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>